人生の指針

修証義・発願利生の教え

成寿山善光寺住職
横浜善光寺留学僧育英会理事長
黒田武志

今、携帯電話を片手に華やかな街を歩く日本の若者たちに、『正法眼蔵』の一部分でも手渡し、

「ぜひお読みなさい」

と言っても、たぶん彼らは受け取らず、まったく無視することでしょう。仏教書＝難かしい書物・おもしろくないもの――そうした固定観念を持ち、ほんの一握りの興味さえもわかないかもしれません。

たしかに、『正法眼蔵』は、古来から、あまりにも難解であり、そして膨大な書で、一般の人にはとても読みこなせるものではないと思われてきました。専門用語の高度さ、それを解説する書もまた仏教語によって書かれているため、よりいっそう読みにくいイメージがあるようです。

しかし、どんなに難解であっても、その原点に立ち返って、先入観抜きにして真っ白な心で接してみれば、そこには、人間誰しも――幼子でも、学生さんでも八十歳を越えたご老人でも、日本という国を知らない外国の方にでも――あ

てはまる、普遍的な、人生を生き抜くためのすばらしい知恵・魂が描かれていることに気付くことができるはずなのです。仏教を深く学んだ人なら、数多くの言葉の宝を自分の実生活に生かして真の安らぎに満たされていくことでしょう。しかし、仏教をまったく知らない人にでも、誰かがその真髄を、誰にもわかる言葉と心で、かみ砕いて伝えてやれば、それは、同じように彼らの生活に生かされていくに違いありません。

大人からみれば、眉をひそめることがある現代の若者たちも、半世紀もたてばきっと、

「今どきの若いものは……」

というセリフを思わずはいてしまう、次代の若者を育成する日本の中枢の年代になっていることでしょう。今から四千年昔のエジプトで書かれたらしいパピルス文書が発見されたとき、それを学者が解読すると、〝今どきの若者はけしからん〟という意味のことがあったというような話があるほど、〝理解しにくい若者〟は、いつの時代にも存在しましたし、現に、私だって、そうした若者時代を過ごしてきたのだと思います。

ただ、私にとってありがたかったことは、寺の家に生を受け、幼い頃から仏の道に携わる父や兄に囲まれ育ってきたことでした。ですから、未成熟な若者時代にも、自然に道元禅師の心に触れる機会を持つことができたのです。そして、師の生き方、考え方は、経験を積めば積むほど年を重ねれば重ねるほどに、私の血となり肉となっていきました。禅の教えを禅堂の中でだけ解釈するのではなく、その教えを、生きとし生ける者の日常生活の中で活かしていかなければ、道元禅師の心を後世に残すことにはならないのではないかとしみじみと感じるようになっていったのです。

道元禅師が伝え残したかった、真の釈尊の教え――それを学び、守り、後世に残せる若者づ

くり。人材づくり。いつしかそれが私の誓願となりました。

その実践的な方法は後で記させていただきますが、まずは、仏教についてまったく関心がないと言い切る若者にも少しでも興味の心を芽生えさせてほしいという願いをこめて、『修証義』の教えについて触れておきたいと思います。

人間本来の美しい生き方――修証義

釈尊は、いろいろな機会に多くの人と接して、仏教という教えを説いてこられた方です。仏教には、「八万四千の法門」の教え――中に入れば真理は一つだけど、その入口・門はたくさんあるということ――があり、それらはすべて、言葉による教えでした。言葉によらなければ、思想を伝達することはむずかしいことですが、しかし、言葉というものは、何世紀も過ぎていけば、その解釈のしかたなどで本当の意味からずれてしまうこともあります。釈尊は、八万四千の法門の他に、まったく異質な、言葉によらない教えというものがあるということも伝えられました。それを伝えるためにどうしたかというエピソードに、一輪の花を、ただ、ひねってみせるというものがあります。それを見ていた弟子の摩訶迦葉は、言葉を使わず〝微笑〟によって、釈尊のおっしゃっている意味がわかりましたと伝えました。これが、仏教の言葉でいうと、〝拈華微笑〟と呼ばれる公案です。

この、言葉によらない、異次元の法門が、禅であり、正法眼蔵なのです。そして、道元禅師はご自身の主著を『正法眼蔵』と名付けられました。言葉による八万四千の教えは、「正法蔵」と言います。正法とは釈尊の教えであり、それは文字で書かれた八万四千巻の経典となり〝蔵〟に収められました。それが正法蔵です。仏弟子たちによって受け継がれ守られていきましたが、

それだけでなく、いつ、どんな時代にでも、その経典を正しく理解し読み取る心・智慧が必要です。その直観的な心が〝眼〟なのです。正法眼蔵――正法を正しく学ぶことができる直観的な智慧の教え。その言葉や文字のない教え…禅――をこよなく大切に思い、伝えられたのが道元禅師です。

心から心に伝える。自分自身で気づく。むずかしいことに思えるかもしれません。しかし、私たちは日常生活の中で、こういうことをかなり多く経験しているはずです。相手の心を思いやることができるのは、私たちが、やさしさを常に心の中に持っているからです。波長が伝わると言ったらいいのでしょうか。美しい自然に感動させてもらえたり、赤子の微笑に幸せいっぱいの気持ちにさせていただいたり、それは、難解な言葉や知識を越えて得ることができる静かな安らぎの境地です。そこには、我というものがありません。言葉や文字を異にする外国人同志も、あっという間に共有できる不思議な力です。

『正法眼蔵』は、そんなふうに考えて見てみると、心温かくなる教えに全体が満たされているのがわかります。仏法の真髄を説いた日本最高の哲学書と聞けば、読む前から、自分にわからないのではないかと一歩引いてしまう人もいるかもしれません。しかし、『正法眼蔵』九十五巻の中から二十四巻を選びまとめられた『修証義』は、奥が深くて難解な教えを、たいへんかみくだいて優しく教えてくれているものであり、時代がどんなに変化しようとも変わることのない、大切な、人間本来の美しい生き方を示してくれる書なのです。そして、その内容を自分のものにできたとき、それが、どんどん伝わって全世界の人の心にまで染み渡ったとき、この世から、争いという言葉は消えて無くなるのです。

さて、『修証義』では、次のようなことが説かれています。

第一章　総序

「人生とは何か。それを究明することが、仏教徒として一番大事なことです。今、私たちは、人間としてあたりまえに生きているのではありません。この世に、人間として生を受けることはむずかしいことだし、仏法に出会うこともまれなことです。しかし、あなたは人間として生まれ、仏法に出会うこともできた。これは、すばらしいことなのです。人生というものは、はかないものかもしれません。月日は一瞬もとどめることはできないし、美しい顔の少年もいつの間にかどこかへ行ってしまいます。過ぎ去った日々に出会うことはできません。だからこそ、このかけがえのない人生を、充実させて生きなければならないのです。善と悪、因と果、業と報い、過去・現在・未来の三世というあらゆることを学び理解しないでいると、よこしまな考えに陥ってしまいます。この世で、私という存在は、たった一人しかいません。いたずらによこしまな考えに堕ちて、悪い行いを平気でして、その結果が自分にかえって苦しむなんて。たった一度の人生なのに、惜しいことではありませんか。」

たった一度のかけがえのない人生を、精いっぱい生きることの大切さを教えてくださっています。

第二章　懺悔滅罪（過去の悪業を悔い、罪がなくなることを仏に願う）

「仏や祖師たちは、私たちを憐れむあまり、仏道の広大な慈悲の門を開いてくださっています。これは、生きとし生けるもの、すべてを間違いなく悟りの境地に至らせ、救ってくださろうとするためなのです。過去に犯してしまった悪業はその身に受けることにはなりますが、しかし、

心の底から反省し、懺悔すれば、重い報いも軽くなり、また、罪が滅んで浄らかな身となることができるのです。心から仏さまに懺悔した功徳の力が、私たちを救い、浄らかにしてくださいます。浄らかな心がひとたび現れると、自分も他人も浄らかになり、それが自然やすべてのものに行き渡ります。一所懸命に仏の道を学べば、必ず仏祖のご加護があり、仏祖とおなじようなすばらしい力を得て生きることができるのです。」

一度犯してしまった過ちは、もうどうすることもできない、ということではなくて、罪を犯した者まで救おうとするのが道元禅師です。心から反省し悔い改めれば、あなたも浄らかな人になれますよ、と、救ってくださるのが仏です。犯罪を犯し、心が改まらないのに、法律で決められた刑期を過ごしたから、自分は自由になったという人は、決して真に浄らかになったとは言えないのです。罪業の根源をことごとく溶かすためには、本心からの涙枯れるほどの懺悔の心が必要であり、それは、強制されて生まれるものではありません。誰も見ていなくても、自分の心は、もう一人の自分が見つめています。本来、仏そのものである、もう一人の自分が……。

第三章　受戒入位（仏の子としての道に従い、それを受け、守り、仏として目覚めさせていただく）

「心の底から悪業を懺悔して、本来の不垢不浄の自己に帰って罪を清めたら、次に深く、仏・法・僧の三宝を敬いたてまつることを願うべきです。インドでも中国でも、仏祖が正しく伝えられたところは、仏法僧をつつしんで敬っています。いたずらに迷信や邪教に頼っても、もろもろの苦悩から解放されることはありません。次に三つの浄らかな戒と、十の大切な戒を受けなければなりません。

三つの浄らかな戒――生活のきまりというのは、

一、すべての悪と不善は行わないというきまり。

二、すべての善いことは行うというきまり。

三、自分だけではなく、他の人に対して、善いことをしていくというきまり。

です。

人として必ず守らなければいけない十のきまりというのは、

一、殺さないきまり。

二、ぬすまないきまり。

三、みだらなことをしないきまり。

四、うそ、いつわりをいわないきまり。

五、酒を売ったり買ったりしないきまり。

六、他人のまちがいを強調しないきまり。

七、自分をほめて、他人をけなさないきまり。

八、他人に施すことを惜しまないきまり。

九、怒ったり腹をたてないきまり。

十、三宝をそしらないきまり。

です。

これらのきまりをすべての人びとが受けて守り、絶対的な確信が決定すると、そのまま仏の世界に通じることになります。大宇宙のすみずみにまである地、草木、石ころまでもみな、仏としての仕事をくり広げているから、そのことによって起こる風や水の利益を受ける人びとがみな、深く広い、人間の思いでははかり知れぬ仏の力に助けられて、悟りを開くのです。新しい、真実の人生が開けてくるのです。同時に、多くの人々や社会、宇宙のためにお役に立ちたいという気持ちが起こってくるのです。」

三宝――仏・法・僧。まず、「仏」というのは、仏教の歴史から言えば、今から二千五百年前に仏陀（悟りを開いた人の意味）になられた釈迦牟尼・お釈迦さまです。敬まった言い方で、釈尊と言いますが、釈尊の説かれた教え＝真理が、

「法」です。そして、釈尊を中心にサンガ（和合衆と呼ばれる釈尊の教団）形成したお弟子たちが「僧」で、これを「現世三宝」と言います。これは、釈尊の在世時代の仏法僧という意味です。釈尊が入滅した後は、釈尊そのもの、また、その心をかたちとして現した礼拝の対象物を「仏」、お経を「法」、そして今日ただ今もなお仏陀の教えを身にとどめ保っているお坊さんを「僧」と言い、「住持三宝」と言います。

『修証義』第三章「受戒」の章では、この三宝に帰依することからすべては始まると説かれています。帰依するというのは、信じて私たちの究極の心の依り拠にすることです。帰依の同義語に「南無」という言葉がありますが、「南無」はインド語の「ナモー」「ナマス」の音写で、〃首や背中を曲げて礼拝する〃という意味があります。〃礼拝〃は、身を投げ出すという意味でもありますから、衆生の心身を投げ出して、本来の自己に帰ることを言います。道元禅師は、「礼拝が世に住まる限り仏法は絶えない」とおっしゃっています。

東洋では、日常の挨拶のときに、自然にお辞儀をします。手を合わせる国もあります。これは、伝統的な本当に美しい姿です。「どうも」の一言ですべてを終わらせる現代日本の若者や、これから仏教を学びたいという西洋の方々にも、三宝とともに、この〃礼拝〃の深い意味を知っていただけたらと思います。

第四章　発願利生（苦しみ悩みの世界に身を捧げると誓い、誓願を起こして、世の人のために奉仕する）

「自分のことはさておいても、他の人のために尽くすという願いを起こし、これを完成させようと努力することは、どのような人にとっても大切なことです。その姿かたちは、みすぼらしくとも、この心を起こすと、すでに生きとし生

けるものの指導者となります。たとえ七歳の幼い女の子であっても、ただちに、仏の道を学ぼうとするすべての人の指導者であり、生きとし生けるものの慈しみ深い父なのです。だから、急いでこの願いを起こすべきです。

生きとし生けるものを幸せを与えるには、四つの真実の智慧を、自分の願いとしなければなりません。四つの真実の智慧とは、

一、布施――むさぼらないで、施すこと。真心から与えること。

二、愛語――生きとし生けるものに、まず、慈しみ、愛する心を起こし、やさしい心のこもった言葉をかけること。親が子に言葉をかけるときのように。

三、利行――自分も他人もともに生きること。立場の違う人さまざまな人が自分の回りにはいるでしょうが、その方々に自分が生かされているということに気づき、感謝して、その方々が得をするよう、幸せになるように手段を思いめぐらして生きること。

四、同事――あらゆるものと仲良く調和して生きていくこと。海があらゆる河の水を拒まないで受け入れるのは、すなわち、自分と他人を区別していないということです。だから、よく水が集まって海となるのです。他の水を区別し汚そうとすれば海全体が汚れますが、美しくしようとすれば、自分自身も自然に美しくなります。

およそ仏道を求める心とその行いと願いは、このような道理があることを、静かに考えてみなければいけません。生きとし生けるものを残らず救う、この功徳を礼拝し、敬わなければなりません」

この、第四章〝発願利生〟の教えは、とくに、私の心を大きく揺さぶり感動させ、今の人生の大きな指針となっているものです。若き日のさまざまな体験的修行と日々の坐禅生活を経て、

最終的に私が大誓願をたて行ってきた諸々の事業の根本に、この、発願利生の教えがあるのです。

第五章　行事報恩（仏の生活をして、仏の恩に報いる）

「四つの真理に生きていくことはたやすいことではない。しかし、この人間界に生まれ、仏道を求める心を起こす機会が与えられたのは釈尊や多くの祖師たちのお導きのおかげです。このご恩を知っていながら、どうしてご恩に報いることをしないでいられましょうか。ご恩に報いるためには、まず、何よりも毎日の生活を大切に、ていねいに、仏さまのいのちとしての生活を営むことです。光陰は矢よりもはやく、いのちは露よりもろい。だからこそ、この一日一日の自分が、かけがえのない尊い仏さまのいのちであり、体なのです。毎日を、自己のありのままのいのち精一杯に生き、仏としての修行生活ができる自分自身を自ら大事にし尊敬しなければなりません。そして、他のいのちを大切に生かし続けるところにこそ、釈尊と相通じる仏法の真髄――坐禅の姿と心で生きていく仏――即身是仏という仏になるのです。そういう仏とはいったい誰のことかと、細やかに心をこめて参究すべきです。それこそがまさしく、仏のご恩に報いることになるでしょう。」

人はどのようにして仏になるのか。つまり、どのような人のことを仏というのか。それを教えてくださっているのが、『修証義』の大事なところでもあります。

世界的視野を持つ若き仏教徒を育てたい

さて、『修証義』に書かれているだいたいの意味はおわかりになったかと思います。私は僧侶である兄の助言もあって、仏教系の駒澤大学・大学院を出て、曹洞宗大本山總持寺、そして永平寺で修行を積みました。しかし、この頃はま

だ、道元禅師の『修証義』の奥深い哲学を自分のものとすることはできず、体を壊して下山するありさまでした。しかし、仏さまは、未熟な私でも、一度仏道を目指した者をほったらかしにはしませんでした。帰京列車の乗り間違えという不思議な偶然が重なって、私は二十歳代で、全国托鉢行脚という、まさかと思うような苦しくそして、貴重な体験を得ることができたのです。何週間も、何カ月も、お金もなく、冷たくされ、野宿を繰り返し、雨が降り、雪が降り、みじめで、悲しくて、せつなくて……。托鉢修行者が必ず携帯する、自分の葬式代でもある涅槃金にまで手をつけてしまうほどの生き地獄を味わいました。しかし、その体験の中から、はじめて私は、自分のいのちの尊さを、そして、生きとし生けるもののいのちの尊さを実感することができたのです。明日のいのちもわからないほどの体験をした時に、ふっと、自分が僧侶だということを思い出しました。恥も外聞も何もなくなって、我さえも忘れ、一人の僧侶となったとき、自分がするべきことは、仏道の修行であり、人さまのために般若心経を唱えることであり、ただ、それだけで満ち足りるではないかと、心底思えたのです。それからの、十円のご喜捨のありがたかったこと。仏に生かされている自分を感じることができるというのは、どんなに幸せな気持ちになることか。そうしみじみと思ったときに、それまでざんざん降りだった雨が上がり、雲の隙間からサーッと陽の光が射した、そんな、夢のような体験も、実際に味わいました。

全国托鉢行脚を終えた私は、新たな気持ちでゼロから仏道を学びたいと思い、誰かにすすめられるというのではなく、改めて自分の意志で、大本山總持寺で三年間の厳しい僧堂生活に入りました。その後タイ、インドへと留学して修行

し、タイのワット・パクナムでは二二七の戒律を守る生活で魂が浄められていくような気持ちを持つことができました。三十数年前の当時でさえ、何の目的もなく、ただ漠然と自分だけの楽しみだけ求めて生きている日本の若者と、仏教者を心から尊敬して生きるタイの若者たちとのあまりの生き方の違いに驚きもしました。

三十歳になったとき、次兄が禅センターを開いているアメリカのロサンゼルスに修行に行き、欧米人とともに参禅する日々を送りました。

同じ仏教でも多くに枝分かれしてしまった日本、そして、釈尊の真の教えそのものを学び伝えているアジアの国々、また、仏教以外の神を信仰する西洋の国々。各国を渡り歩き、実際にその地の空気を肌で感じる修行の旅を続けるうちに、私は、一つの光、答え、が見えてきたような気がしたのです。

宗教や宗派にとらわれず、国籍も、年齢も、性別も、職業もまったく関係なく、互いが理解し合い、調和し合ったら、どれほど幸せな世の中になることか。それが、道元禅師思想に通ずる、美しい海になるということではないだろうか。生きとし生けるものすべてを救い、幸せな世界をつくることが、釈尊のみ教え、つまり、仏教の原点。それを伝えることが、今の私の生きる道なのだ、と。

互いを理解するためには、互いの生活の中に溶け込んで、言葉や習慣、文化をそれぞれがわかり合い、そして最終的に心の共通点を見つけ出していくことが必要なのではないだろうか。そういうことが、何の壁もこだわりも持たずにできる、グローバルな視野を持つ若者を、人材を、育てていけたなら！

この思いは、アメリカから帰国後、尊い仏縁に生かされて横浜に善光寺を開創してからも、ずっと心に抱き続けていたことでした。

そして、昭和五十九年。開創十五周年を迎えた年に、長年思い抱いてきた願いを、具体的に実行に移すことが急務だと感じて、『横浜善光寺留学僧育英会』を設立したのでした。

人類は宇宙時代に入り、時間的にも空間的にも距離は著しく短縮されて世界はあたかも一国の観を呈しておりますが、反面、人類はかつてない不安と絶望の危機に見舞われています。これは、道元禅師が生きた、混迷の時代・人間の尊厳が失いかけた時代ともよく似ています。そのような時代に、独自の境地を開き、宗教の名にこだわらず、「ただ、ひとすじの正しい仏法あるのみ」という信念で人々に救いの道を説いた道元禅師の生き方と思想はまさに、時代を越えた永遠の真実として、後世に残さねばなりません。これほどの偉大な師を持つ、世界でも有数の仏教国でありながら日本の仏教界は、世界の大勢に即応して教化の実をあげる態勢に欠けていることを感じ、海外生活を通して広く世界に活眼を開く人材育成の重要性を痛感したのでした。

悲劇のない未来へ向かって

この、「海外に留学僧を派遣し、日本に海外からの留学僧を受け入れ」て、「世界平和に寄与する」という壮大な大誓願に対して、〝財産もない小さな一寺の住職にそんなことができるわけがない〟と心配してくださる声も設立当初には少なからずありました。しかし、私の心には、『修証義』第四章の、発願利生――どんなに苦しくとも、いのちをかけて世の人のために奉仕する――という教えが、深く刻み込まれていましたし、また、信ずれば必ず花開くという確信も、長年の禅生活の中で体得しておりましたので、決心がゆらぐことはありませんでした。

おかげさまで、多くの方々のご援助、ご協力

を得て、一歩一歩着実に育英生の数は増え、十六年たった今日では、その数のべ九十八名にのぼりました。育英会の関係国十八カ国・一地域、派遣国は十三カ国（アメリカ・タイ・インド・スリランカ・イギリス・フランス・イタリア・オランダ・韓国・カンボジア・ドイツ・スイス・オーストリアなど）。受入れ国は九カ国・一地域（アメリカ・スリランカ・韓国・中国・フランス・バングラディシュ・日本・台湾・ポーランド・ベトナムなど）となり、仏法のため、人のためなら命をも惜しまずというほどの情熱ある若き僧侶たちが、世界各国で修行に取り組みながら現在も活躍してくれています。

彼らが果して、日本から自分の国へ何を持ち帰ってくれるのか、海外から日本へ何を持ち帰り、どんな行動を起こしてくれるのか、まだまだ未知数ではありますが、必ずや宗教宗派意識を超えて、道元思想をまっすぐに現代の世に伝えられる国際的宗教者となってくれるであろうと私は信じています。やがて、十年後、二十年後の世界に、活き活きとした仏法の泉を沸かせてくれることを思うとき、私の限りある生命が、『修証義』でいうところの〝露ほどもろい――だからこそかけがえのないいのち〟が、世の中のなにがしかのお役に立ち、一隅を照らすことができるかもしれないと、喜びで胸が熱くなります。

一昨年、開創三十周年の節目を迎える前年に、スリランカで長年にわたり、教育・文化・宗教活動を展開した高僧、ウドゥヌワラ・サラナンダセロの業績を世に広めるために創設された政府公認の慈善団体「サラナンダ財団」より、〝仏教を学ぶ若い僧侶や研究生の海外留学と、外国から日本への留学生を支援する育英事業を高く評価する〟との理由で、国際部門の栄誉賞と称号を授与していただきました。スリランカとい

う伝統ある仏教の国・ともに釈尊の教えを信奉する国から評価していただいた――、このことは、歴代育英生たちが、いかに熱心にその国々で学び、溶け込み、教化活動に力を入れてきたかが認められ、かたちとなったものと私は受け止め、たいへん嬉しく感じました。

今年で育英生も第十七回生を迎えることになりますが、第一回生から毎年、彼らは体験的に得てきた智慧を論文にまとめ提出しています。『人間は心の持ち方で生き方が変えられる。釈尊の説いた慈悲の精神は、私たちに示された、平和を樹立するための英知である。私たちはこの精神を誇り高く掲げて、不戦、恒久の平和の誓願を世界へ向けて伝えたい』といった内容の真摯な論文に眼を通すたびに、若い力が育ち成長しているのを実感することができます。そして、彼らが今後、どんな困難な壁に突き当たろうともそれを乗り越えて、必ず花開かせ実を結び、また、新たな種を蒔いていってくれるであろう、と。

言葉も習慣も文化も異なる国での、ストイックな修行生活は、この世の中の娯楽も知っている世代の若者にとって、どんなにか辛いこともあるでしょう。しかし、彼らは、仏道を自ら選んで歩んでいます。それができるのは、彼らがすでに仏そのものだからです。生きとし生けるものは、すべて、生まれながらにして仏性を持っているのです。私は、仏教のことにまったく関わりないと思っている若者にも、まず、このことを知ってほしいと願っているのです。

百年、二百年後の世界に、片手の携帯電話の代わりに、『正法眼蔵』の一巻でも持って歩く若者の姿。お坊さんが通るのを見て、思わずお布施をし手を合わせる若者の姿。笑い話でも夢物語でもなく、私は真面目にそんな姿をイメージします。

私のイメージする日本の未来の若者の姿は、現代のタイ国の若者の姿に重なっています。タイには毎年訪問しますが、昨年は、世界最高の仏教建造物と言われる〝ブッダモントン〟のあるバンコク西部の町に参拝の旅に行ってきました。ブッダモントンは、仏紀二五〇〇年を記念する事業として一九五五年から建設が始まった国家プロジェクトの施設です。この建物の中に二十世紀最大の仏教遺産ともいわれる『南伝大蔵経』の経蔵があります。縦二メートル、横一・一メートルの板碑の数は、七〇九基。その表と裏、一四一八面にびっしりと、パーリ語で経・律・論の聖典が手掘りで刻みこまれています。これらは、かつて私も若き日に修行した瞑想の寺、ワットパクナムの僧侶たちが、精根こめて、一字一字彫ったものです。今の日本であれば、何十年たっても完成しないかもしれません。また、賃金がどうこうという問題が起こってくる

かもしれません。しかし、タイ国では、この仏教遺産『南伝大蔵経』を十年で完成させました。彼らを動かしているのは、お金ではありません。功徳の力です。現世で一所懸命徳を積もうとする清らかな心です。私は上座部仏教も学んだ者として、小乗とか大乗とか、そうした垣根を越えて、登る道は違えど、頂点――真理――は一つ。〝宗祖を通して、釈尊に還れ〟を宗教生活の原点として生きてまいりました。タイを訪問し、この信仰のエネルギーの凄まじさを目の当たりにするたびに、タイ国民一人ひとりの中に釈尊のいのちが息づいているのを実感することができるのです。

道元禅師も、「仏祖が正しく伝えられた国では、仏法僧をみな敬っている」とおっしゃっていますが、タイ国はまさに、仏と自分を切り離さず、究極の心のよりどころとして三宝を大切にしている国の代表とも言えましょう。

コンピュータ時代、情報化社会の最先端を走り続けているわが国、日本。戦後の廃墟の中から不屈の精神で立ち上がり、休むことなくまっしぐらに走り続けたそのパワーは、たしかにすばらしいものです。しかし、がむしゃらに走り続け、自分たちの利潤の追求ばかりをエスカレートさせていった結果、大切な心を見失ってきてしまったような気がします。道元禅師が残してくれた、真の仏の教えという、汲めども尽きぬ貴重な智慧の財産を持ちながら、振り向きもせず、また、誰からも教わることもなく、突っ走ってきた日本人。我が国の自殺者は、平成十年には、三万二八六三人に達しました。その前年には、二万四千人台だった自殺者数がたった一年で八千人近くも増加したのです。これはあの、大きな戦争を体験したときよりも多い、未曾有の数字です。

そして、国内だけでなく、世界に眼を向けれ

ば、一九九〇年代になって各地で地域紛争が急増し、紛争とは関係のない幼い子どもたちまでもが犠牲になって、亡くなった子どもの数は二百万人、地雷などで傷ついた子どもは六百万人。たった今、この瞬間にも、世界のどこかで、近代兵器の犠牲となり、悲惨な戦闘に巻き込まれて尊いいのちを失っている子どもたちがいるのです。紛争を起こす憎悪の根底にあるのは、貧富、経済格差であり、それが人種や宗教間の憎しみを生み出しているのです。

道元禅師の教えは、貴族とか大衆とか、賢者・愚者、出家や在家、罪のあるなしも問わない、すべての生きとし生けるものを救う智慧です。今の時代であれば、経済格差、人種差別、思想差別、すべての垣根を越えた、極めて普遍性の強いものです。大宇宙の真理です。川の水も池の水も雪も霧雨も、何もかも差別なく包み込む大きく繋がる一つの海です。

私が、今、日本で仏教を学ぶ若者を支援し、また、海外に留学僧を送り出すことは、宇宙的規模でみれば、無にも等しいほどの小さなことかもしれません。しかし、それでも、無ではない。一ミリにも満たない種も、年月がたてば大木となり、森林となり、一山中がその種の子孫でうめつくされる日は必ずきます。いつの世にも、〝遅すぎる〟ということはないと思うのです。

二十一世紀をはばたく真の平和の使者となる仏教徒たちに、私の思いをすべてバトンタッチできる日まで、私は仏さまから頂いた、限られた尊いいのちを生きていきたい。二百年、三百年後の世界というのは、空想の世界ではなく、必ずやってきます。そこは、子どもの笑顔といのちが消えることのない、地球人一人ひとりの心の中に釈尊のいのちが息づいている、悲劇のない未来であるとかたく信じております。